ビジネストーク

# 続ける「“いきものがたり”活動」

頭取 大道 良夫

去る1月23日、恒例の「ニゴロブナ・ワタカ放流式」と「ヨシ刈り」が草津市烏丸半島で行われ、当行役職員約２００名が参加しました。

２０１２年10月号の本欄でもご紹介しましたが、琵琶湖には60種を超える固有種が生息しています。代表的な魚で、琵琶湖の特産・ふなずしの材料ともなる「ニゴロブナ」、繁茂する水草を食べて水質浄化に役立ってくれる「ワタカ」の養殖・放流事業は年を重ね、今年で、それぞれ約30万匹、22万匹を放流したことになります。

ニゴロブナの漁獲量は、１９８８年は１９８トンでしたが97年に18トンにまで激減。しかし、最近では51トンにまで回復したとのうれしい情報もありました。

琵琶湖岸のヨシ原は魚や水鳥の絶好の産卵・生育場所で、富栄養化の原因となる窒素やリンを吸収、水質も浄化します。そのヨシ原を守るため、99年から毎年、多数の役職員が厳冬の湖岸に出て「ヨシ刈り」に取り組んでいます。刈り取ったヨシは紙資源として私たちの名刺作りに活用しています。ヨシの減少地域では「ヨシ苗植え」も行っています。

旧野洲川河川敷の「びわこ地球市民の森」では、毎年8月と10月の2回、「森づくりサポート活動（植樹林の下草刈り）」を続けています。２００１年秋、役職員が山でドングリの実を拾い集め、それぞれの家庭や職場で2年がかりで育てた苗木1万本を植樹したことから活動が始まりました。

琵琶湖の魚保護では、最大の脅威の外来魚「ブラックバス」や「ブルーギル」を対象に「外来魚駆除・釣りボランティア」も行い、女性や子どもたちに「釣り堀よりよく釣れる」と大人気のイベントで、釣り上げた外来魚は加工して肥料に。

一方、子どもたちの「いきもの」を大切にする心を育てようと県内小・中学校での「ビオトープ」づくりにも助成し、生物や自然と触れ合う場の提供に努めています。これまでに33校で「学校ビオトープ」づくりをお手伝いしました。

私たちは一連の活動を「〝いきものがたり〟活動」と呼び、活動内容にストーリー性を持たせているのが特徴です。例えば、ドングリを「拾って」「育てて」「植樹して」「下草を刈り」、やがて生長した落葉樹の「コナラ」や「クヌギ」の落ち葉に雨水がしみこんで浄化され、琵琶湖に注ぎ込んで次の命を育てる、などのストーリーが展開されます。

一方、私たちは、県内各地の取り組み、例えば「伊吹のススキ刈り」や「ビワマス遡上プロジェクト」「オオバナミズキンバイ除去大作戦」などにも積極的に参加させていただき、地域や企業の皆さんとの連携の輪が一段と広がっています。

自然界はさまざまに連鎖していますが、私たちは活動に「ストーリー性」を持たせるとともに地域の皆さんと手をつなぎながら、夢のある楽しい活動を目指して「〝いきものがたり〟活動」を続けてまいります。ご支援をお願いします。

BUSINESS TALK